

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 120 回 日本人の心『靖国』を主張する！

今年もまた小泉首相は「靖国神社」を参拝した。もはや国際問題化しつつある「靖国問題」、「君はどう思うか？」なるご指名もあり、小生も多事争論の中、一矢を報いたい。

これは全くの「小生流靖国論」、荒唐無稽、浅学稚拙なる故は、最初に誤っておく。

まず、何ゆえに「靖国問題」なのか...幾つかの切り口があろう。第二次世界大戦における日本の歴史的経緯と自虐的歴史観、いわば「軍立」から始まる「靖国神社」そのものの成り立ち、A級戦犯といわれる人を、英霊として祀っている事実、屈辱的感情論を政治的手段として利用する周辺諸外国との外交的問題...いずれにしても、小生まともに語れるほどの知識も学識も持ちえていない。言ってみれば、論ずる資格すらないのかもしれない。

しかしながら、恐縮だが一言、少し視点を変えて「靖国」を論じてみたい。

「自然法ではいかなる国家も、その国家のために死んだ人に対して、敬意を払う権利と義務がある」と主張したのは、日本占領軍のマッカーサー司令官が靖国神社を焼き払おうとした時、イエズス会の神父が述べた言葉である。その一言により、マッカーサーは靖国を焼くことを止めた。(参照：稲田朋美氏『「靖国」を弁護する』『諸君！』2003年4月号)

日本には色々な宗教があっいいい。が「日本人」としての心の原典に「神道」が根付いていることも事実。これが価値観と文化、漠然とした宗教観の根底になっていると思う。神道の考えに、死後、いい人も悪い人も区別はあり得ず。したがって、人間、死んだ後は全てが「英霊」として祀られるのが自然の理、A級もB級もありえない。これが日本人の心とするのであれば、民族が固有の伝統と方法で戦死者を慰霊顕彰するのは、神道以外のあらゆる宗教、日本以外の多くの外国には、当たり前でありえることである。

家族を思い、祖国を思い、自分の命に代えて祖国を護ろうとした英霊に対し、たとえ一国の総理大臣であろうとも、感謝をささげるために参拝することは、人間として至極当然のこと。こんな尊く、美しく、とって大切な行為や主張を、むしろ我々日本人は忘れかけてしまった。誰かに遠慮しつつ、「日本人の心」を堂々と主張できないこと自体、由々しき事と思ってしまう。

首相の「靖国参拝」をやたら複雑化し、政治問題化するのはいかにも作作的で、意図的な戦術に見えて仕方がない。近い将来、アジア・アセアン・オセアニア等の連携による「アジアブロック化経済」戦略の中で、中国や韓国は、靖国問題を外交的駆け引きの「カード」とするには、あまりにも双方の利点が乏しすぎて、決して得策とは思えない。

いや実は、特別難しい話ではない。一人の日本人として、日本人の心を言っているだけの事、そんな怖い話しではない筈である。今、誰かが言わなければ、歴史観の根本的に違う諸外国の、日本人に対する誤解を、永遠に解消することはできないと思っている。